

DSHEng5 装置通信エンジン(GEM+GEM300)
ソフトウェア・パッケージ

装置起動ファイルコマンド定義仕様書

2019年12月 (改訂-1)

株式会社データマップ

[取り扱い注意]

- この資料ならびにソフトウェアの一部または全部を無断で使用、複製することはできません。
- 本説明書に記述されている内容は予告なしで変更される可能性があります。
- Windows は米国 Microsoft Corporation の登録商標です。
- ユーザーが本ソフトウェアの使用によって生じた遺失履歴、(株) データマップの予見の有無を問わず発生した特別損害、付随的損害、間接損害およびその他の拡大損害に対して責任を負いません。

【改訂履歴】

番号	改訂日付	項目	概略
1.	2019. 06. 06	初版	(DSHEng4 と互換性あり)
2.	2019. 12. 16	訂正と記述追加	誤字等の訂正 説明の追加など。
3.			
4.			
5.			

目次

DSHEng5 装置通信エンジン(GEM+GEM300)	1
ソフトウェア・パッケージ	1
1. 概要	1
2. 起動ファイルコマンド一覧表	2
3. 起動情報定義ファイルの例	4
4. ログファイルの保存方法	5
4. 1 世代別ログ保存	5
4. 2 日付別ログ保存	5

1. 概要

DSHEng5 の“装置起動ファイルコマンド”の仕様は、DSHEng4 の仕様と同じです。(2019年2月6日現在)

DSHEng5 装置通信エンジンにおいては、装置の起動時に、動作時の環境条件を定義するために起動コマンドファイル（以下起動ファイルと呼びます）を指定して起動します。

起動ファイルは以下のような環境条件を指定します。

- (1) 当該装置のログファイル保存のためのディレクトリ、ファイル名などの情報
- (2) 管理情報バックアップファイル保存ディレクトリ名
- (3) 装置の通信サイド（装置、ホストの指定）
- (4) HSMS 通信ドライバー-DSHDR2 で使用する通信ポートとデバイス番号
- (5) DSHEng5 装置管理情報定義ファイル名
- (6) 装置管理情報の最大登録 ID 数
(稼動中に生成、削除される管理情報が対象になります。)

次ページに起動ファイルコマンドの一覧表を示します。

本装置起動情報定義ファイルならびに装置管理情報定義ファイルの編集は、DSHGEMSET.EXE 編集プログラムを使って編集、作成することができます。詳しくは、次の資料を参照してください。

DSHEng5-09-30308-00 「DSHEng5, DSHENG3 起動ファイル、管理情報ファイル設定・編集プログラム説明書」

(参考) DSHEng5 が起動時に必要とする3つの関連ファイル（ファイル名は変えてもかまいません）
これらファイルはDSHENG5 と互換性があります。

(1) エンジン起動ファイル：装置起動情報が設定されているテキストファイル
equip.cnf EngStart() 関数の引数になります。

(2) 通信定義ファイル：DSHDR2 通信ドライバーのための HSMS 通信条件が定義されているテキストファイル
comm.def EngStart() 関数の引数になります。

(3) 装置変数定義ファイル：装置の変数、CE, REPORT, ALARM ID と値が定義されているファイル
EQINFO.FIL (EQINFO.TXT をコンパイルしたファイル) equip.cnf 内に名前が指定されます。

2. 起動ファイルコマンド一覧表

コマンド名とそのフォーマットは下表のとおりです。

#	コマンド名とフォーマット	機能	コマンド例
1	LOG_PATH = <ディレクトリ名>	装置のログファイルの保存ディレクトリ名を指定します。	LOG_PATH = c:\YDSHEng5¥log
2	LOG_MODE = <モード>	日付単位か、世代単位でのログ保存モードを指定します。	LOG_MODE = 0 (世代単位) LOG_MODE = daily (日付単位)
3	LOG_LIFE = <月数>	日付単位での古いファイルの保存期間を月数で指定する。(デフォルト=6)	LOG_LIFE = 6
4	LOG_FILE = <ファイル名>	装置のログファイル名を指定します。	LOG_FILE = "equip. log"
5	LOG_SIZE = <行数>	ログファイルに保存する最大行数を指定します。	LOG_SIZE = 100000
6	BKUP_PATH = <ディレクトリ名>	装置管理情報のバックアップファイルを保存するディレクトリを指定します。	BKUP_PATH = "C:\YDSHEng5¥backup"
7	INFO_FILE = <ファイル名>	装置管理情報定義ファイル名をフルパスで指定します。	INFO_FILE = "c:\Ydshgemfil¥eqinfo. fil"
8	INFO_BACKUP = <1/0>	装置管理情報のバックアップを行うかどうかを 1, 0 で指定します。	BACKUP_FLAG = 1
9	SPOOL_PATH = <ディレクトリ名>	装置管理情報の SPOOL ファイルを保存するディレクトリを指定します。	SPOOL_PATH = "C:\YDSHEng5¥spool"
10	PP_COUNT = <n>	PP(プロセスプログラム)最大管理数を n 個にします。(S7F3)	PP_COUNT = 64
11	FPP_COUNT = <n>	FPP(書式付プロセスプログラム)最大管理数を n 個にします。(S7F23)	PP_COUNT = 80
12	RCP_COUNT = <n>	RECIPE 最大管理数を n 個にします。(S15F13)	RCP_COUNT = 80
13	CAR_COUNT = <n>	CARRIER 最大管理数を n 個にします。	CAR_COUNT = 16
14	SUBST_COUNT = <n>	SUBSTRATE 最大管理数を n 個にします。	SUBST_COUNT = 250
15	PRJ_COUNT = <n>	PRJ(プロジェクト)最大管理数を n 個にします。	PRJ_COUNT = 16
16	CJ_COUNT = <n>	CJ(コントロールジョブ)最大管理数を n 個にします。	CJ_COUNT = 16
17	TRACE_COUNT = <n>	TRACE 最大管理数を n 個にする。	TRACE_COUNT = 15
18	CAR_CAPACITY = <n>	1 個のキャリアの最大収納エーハ枚数を n 個にします。	CAR_CAPACITY = 25
19	COMM_PORT = <ポート番号>	DSHDR2 通信ドライバーで使用するポート番号を指定します。	PORT = 1
20	COMM_DEVICE = <デバイス番号>	DSHDR2 通信ドライバーで使用するデバイス番号を指定します。	DEVICE = 1

21	S1F13_SEND = <0/1/2>	通信確立方法を指定する。 (S1F13 のやり取りと確立)	0 : 相手からの S1F13 だけを待機する。 S1F14 ack=0 を返却し、無条件通信確立とする。 1 : 相手からの S1F13 については上記 0 と同様で、自身の ENABLE によって、S1F13 を送信し、ack=0 の S1F14 受信によっても通信確立とする。 2 : ENABLE によって S1F13 を送信し、ack=0 の S1F14 受信で通信確立とする。 また、Enable の後、S1F13 受信で ack=0 応答し、通信確立とする。
22	RP_LISTV = <0/1>	Report にフォーマット = LIST が指定された場合の装置管理情報の定義の仕方を指定する。	0 : 旧仕様(ネスティングできない) 1 : LIST 変数を指定すれば、その LIST 変数にリンクできる(デフォルト)
23	NO_MBLK	S6F5 などの SECS-II でマルチブロックのメッセージを送信する際、予め Multi-Block Enquire メッセージを送信しないようにするために使用	0 : Multi-Block Enquire を送信する。 1 : Multi-Block Enquire を送信しない。 デフォルトは 0 (送信する) です。 (本コマンドが無い場合)
24	WBIT_S6F1	S6F1 送信時、W-bit の選択設定をする。 W-bit=0 の場合は、応答メッセージを期待しない。	0 : S6F1 の W-bit = 0 で送信する。 1 : S6F1 の W-bit = 1 で送信する。 デフォルトは 1 です。
25	WBIT_S6F11	S6F11 送信時、W-bit の選択設定をする。 W-bit=0 の場合は、応答メッセージを期待しない。	0 : S6F11 の W-bit = 0 で送信する。 1 : S6F11 の W-bit = 1 で送信する。 デフォルトは 1 です。
26	LEN_ALTX	S5F1 の ALTX のバイト長を設定する。	値の範囲は 40~128 とする。 デフォルトは 40 バイトです。 < 40 の場合は = 40 に >128 の場合は = 128 に設定する。
27	TRACE_STIME	S6F1 のトレースデータの中の STIME のフォーマットを指定する。	12 : "YYMMDDHHNNS" 12 桁表現 その他 : デフォルト "YYYYDDHHNNSCC" 16 桁

(注) 装置変数、収集イベント、レポート、アラーム情報に関する登録個数は、装置管理情報ファイル内に定義される数が登録数になります。

3. 起動情報定義ファイルの例

```
//----- equip.cnf - 装置定義ファイル -----  
  
LOG_PATH      = c:\DSEng5¥log  
LOG_MODE      = daily  
LOG_LOFE      = 6  
//LOG_FILE    = equip.log  
//LOG_SIZE    = 100000  
BKUP_PATH     = c:\DSEng5¥backup  
INFO_FILE     = c:\DSEng5¥bin¥eqinfo.fil  
INFO_BACKUP   = 1  
PP_COUNT      = 100  
FPP_COUNT     = 64  
RCP_COUNT     = 200  
CAR_COUNT     = 80  
CAR_CAPACITY  = 80  
SUBST_COUNT   = 250  
CJ_COUNT      = 32  
PRJ_COUNT     = 30  
TRACE_COUNT   = 28  
SPOOL_PATH    = c:\DSEng5¥spool  
COMM_PORT     = 1  
COMM_DEVICE   = 1  
S1F13_SEND    = 2  
RP_LISTV      = 1
```

4. ログファイルの保存方法

ログファイル保存方法には2つの方法があります。方法は、2. 起動ファイルコマンド一覧表の2.以降にあります。

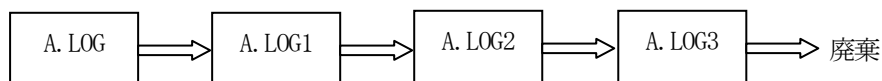
- (1) 世代別保存
- (2) 日付別保存

4. 1 世代別ログ保存

2. で説明しましたコマンド、LOG_MODE = 0 が指定された場合の保存方法です。

LOG_PATH, LOG_FILE, LOG_COUNT コマンドで指定されたそれぞれ DSHEng5 のログファイルに対し以下の世代管理を行います。

- (1) ログファイルに書き込む最大行数を指定し、一杯になったら世代更新するようにします。
ログ情報を書き込んだ結果、LOG_SIZE 以上の行数に達したとき、そのログファイルを1つ古い世代のものとして保存します。そしてログファイルを一旦、空にしてファイルの最初から記録するようにします。
- (2) システム内には古い世代のファイルを最大3個まで残すようにします。
仮にログファイル名を A.LOG とすると最大行数に達したら、次のように世代を更新します。



- ①古い世代のファイル名はログファイル名（拡張子も含む）の末尾に世代番号を付けて保存します。
末尾の番号の順がファイルの古い順になります。（A.LOG3 が最も古い）
- ②世代更新の際に末尾3(A.LOG3)が残っていた場合、そのファイルを廃棄します。
- ③以下、順に A.LOG2 が A.LOG3 に、A.LOG1 が A.LOG2 に、A.LOG が A.LOG1 になります。
- ④最後に A.LOG の内容を空にし、新しいログを書き込むこととなります。

- (3) 管理する行数については次のようにカウントします。
DSHEng5 システム内で使用するログ書き込み関数でログを1回書き込んだら1行としてカウントします。
従って、1回で書き込むログ文字列の中に、複数の改行文字が含まれていると、実際にログファイルに書き込まれる行数はカウント分よりも多くなることとなります。

4. 2 日付別ログ保存

ログ方法が LOG_MODE = daily に指定された場合、日付単位で1個のファイルにログ情報を分けて保存します。ファイル名は、自動的に次のように名づけます。

equip-yyyy-mm-dd.log “

ここで、yyyy は西暦年、mm は月、dd は日をあらわします。

古くなった既存ログファイルは、LOG_LIFE で指定された月期間を過ぎたら、ディスクから削除します。